

学級活動における個別支援の在り方についての研究

— 学校行事へ向けての「できる状況づくり」を通して —

唐津市立北波多小学校 教諭 谷川 忠光

要 旨

本研究は、学級活動における個別支援や場の設定などすべての支援を整備する中で、個と集団の関係に注目しながら個別支援の在り方を探っていったものである。教師が行う個別支援の中で、視覚的な手立てを強調して展開し(他の児童でもその手立てを活用できるような工夫)、特定の児童の成功体験を積み重ねながら、学級の児童たちの活動意欲を向上させることができた。また、教師の支援をあえて少なくすることによって、児童自らが手立てを考えることを仕組んだ。このことによって、児童たちは、互いの認め合いや仲間意識を深めていくことができた。この取組の中で、つまずきのある児童の自己有用感を高めるとともに、個と集団の認め合いや支え合いを広めていくことができた。

<キーワード> ①できる状況づくり ②視覚的な手立て ③つまずきの体験を共有

1 主題設定の理由

特別支援教育の扉が開かれ、各方面で個別支援への取組がなされている。個別支援は、個別対応が基本とされて取り組まれてきたため、そのほとんどが教師による個へのアプローチである。それにより、その児童と教師との関係や児童の学習状況は良好になり、成果を上げている。その反面、対象児自身が周りの児童と自分を比較して、自分ができない児童なんだと自尊心を低めたりする場合や、周りの児童たちが対象児を学習ができない子というマイナスイメージをもってしまったりする場合もある。それによって、対象児が学級集団での自己有用感を低めてしまう。個別支援を展開するには、周りの児童の理解や認め合いが必要である。周りの児童(学級集団)へのアプローチとしては、互いの良さを認め合い、かかわりを深めるために、クラス全員で簡単なゲームや遊びを取り扱った活動も行われている。こういった取組により、支え合う学級集団が作りだせると思う。ここでは、更なる工夫によって周りとのかかわりや理解を深めることができることを狙いたい。

本研究では、個別支援や集団支援、場の設定などすべての支援を整備することによって、児童がつまずきを乗り越えていけるように支援したい。また、児童全員がつまずきの体験を共有することで、個への理解や認め合いが高まり、支え合う土壌が作られていくのではないかと考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

学校行事へ向けた活動を通して、個と集団の関係に注目しながら、環境(できる状況づくり)を整備することで、学級活動における個別支援の在り方を探る。

3 研究の仮説

集団活動における個別支援の必要な児童のつまずきを把握し、条件整備をすることによって、その児童は活動意欲や自信を高めることができ、周りの児童とのかかわりや認め合いを深めることができるであろう。

4 研究の内容と方法

① 学級集団と気になる児童(A児)の実態調査をし、集団と個の実態を把握する。

- ② 学校行事へ向けた活動で、A児のつまずきを把握し、そのつまずきに対応する方策を考える。
- ③ つまずきに応じた視覚的な手立てを学級全体への手立てとして展開し、児童たちの認知を深める。
- ④ 活動中に起こる見通しのもちにくい状況(つまずきの体験)を児童たちに共有させ、それへの対策を考へ出す取組を教師が意図的に仕組み、児童たちの仲間意識を高める。
- ⑤ 仮説の検証(第5学年)を行う。
- ⑥ 支援の在り方に関する研究の成果と課題を考察する。

5 研究の実際

(1) 「個別支援」と「できる状況づくり」のとらえ方

「個別支援」とは、教師が児童一人一人の教育的ニーズを把握して、個に適切な支援を行うことである。ここでは、教師による支援と周りの児童たちによる対象児への認め合いや支え合いを円滑に行いながら、個別支援を進めていくことをねらう。

「できる状況づくり」とは、養護学校において行われている、児童・生徒の実態に応じて、単元のテーマ設定から活動期間・時間、活動の個別化・集団化、道具の配置、授業での教材・補助具作りに至るまで、すべての環境を整えることである。ここでは、養護学校での「できる状況づくり」の方法を参考にし、小学校の特別活動に合わせた方法を探り、実践していくことをねらう。

(2) 学級全体やA児の状況

所属校の5年生は、入学時から単学級である。そこで、学級全体の状況把握に、Q-U学級満足度尺度を用いた。図1に示すように、学校生活不満足群、非承認群とも全国平均より低く、侵害行為認知群がやや高く、学校満足群はかなり高かった。全体的に学校生活には意欲的で、良い状態にあると言える。しかし、グループ活動で頑張ろうとするが、興味をもったことに夢中になり、その活動を乱してしまうなど、集団活動において気になる児童(A児)を学級内でよく見掛けた。このA児は、侵害行為認知群に位置している。Q-U実施・解釈ハンドブックによると、A児の特徴として、他の児童とのトラブルがある可能性が疑われる。

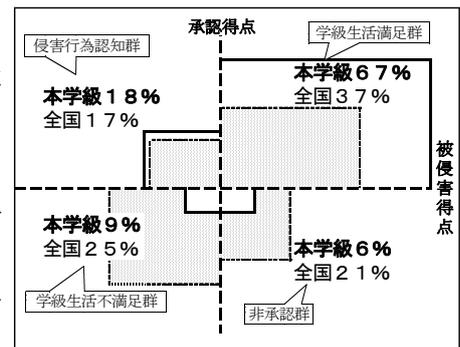


図1 学級の状態

(3) A児の実態把握と集団活動での支援方針

小学校標準学力テストの結果と学習状況、スクリーニングチェック、行動観察、WISC-III検査の結果から実態把握を行った。WISC-III検査については、教育センターなど外部機関に依頼することが多いが、今回の研修で検査法を学び、自ら検査を実施して実態把握に役立てた。A児は、学力テストは学級平均であった。学習状況とスクリーニングチェックによると、言語による入出力につまずきがあると考えられた。行動観察では、何にでも取り組もうとするが長続きしないことが多く、自己中心的な行動が見られた。キックベースボールでは、攻撃の時、前回の順番を覚えておらず、自分の打順から始まることを主張して他の児童とトラブルを引き起こす場面が見られた。WISC-III検査では、全体的に標準域よりもやや下の方に位置し、言語性よりも動作性が少し高い。群指数においては、言語理解が他の群指数より低い。これは、本人内で事実や思考内容などを言語で理解したり、表現したりする力が弱いことを示している。言語性の下位検査では、「類似(論理的な思考力)」や「単語(言語発達水準)」が低く、「理解(過去の経験や知識)」が高い。動作性の下位検査では、「組合せ(思考の柔軟性)」が低く、「絵画完成(視覚刺激に素早く反応する力)」が高い。

A児は、言葉での意思交換が難しく、活動の見通しがもちにくかったり、活動する内容を忘れてたり、相手の言っていることを十分理解できなかったり、自分の思いをはっきり言葉に表せなかったりするこ

とが原因で、周りとのトラブルが生じているものと推測される。学級集団の中で、周りの児童との良好な関係を築いてほしいという願いから、A児の学級活動の目標を「成功体験を重ねながら、学級での自己有用感を高める」「周りの児童とかかわり、互いに認め合い協力し合う」とした。その手立てとして、活動の内容や情報を伝える際に、指示を文字化したり、写真や具体物を用いるなど、視覚的な手立てを学校行事に合わせて用意し、それを中心としながら「できる状況づくり」を展開することにした。

(4) 研究の構想

A児の実態と学級の状況を踏まえ、学校行事に向けての活動で「できる状況づくり」を整備しながら、A児への支援や個と集団の良好な関係作りを図っていく。

第一段階では、まず「持久走大会」への取組において、A児への支援を考え、「できる状況づくり」を整えていく。その中で、練習活動の見通しをもたせるための視覚的な手立てを取り出し、それを個人用から学級用へと幅をもたせて、どの児童でも活用できるような形にする。それにより、児童たちが活動に取り組みやすくなることに気付くようにする。(視覚的な手立ての認知)

第二段階では、「6年生を送る会」への取組において、A児への支援を考え、「できる状況づくり」を整えていく。その中で、練習活動での見通しをもたせるための視覚的な手立てに注目し、児童たちがその手立てを自分たちで講じていけるように活動計画を立てる。計画では、児童たちの活動で見通しのもちにくい状況(見通しのつまずき)を大きく取り上げる。それを解決するための手段として、第一段階で経験したことを思い出させ、児童たち自身が、視覚的な手立てを編み出すようにする。そして、その手立てをみんなで協力しながら実践していく活動を仕組んでいく。このような活動に、学級全員で取り組むことにより、A児は、周りの児童たちと共に成功体験を積み重ね、学級での自己有用感を高め、周りの児童との認め合いや支え合いが進められると考える。

「できる状況づくり」を基に検証授業を行い、その活動で自己有用感の高まりと認め合いや支え合いに向かっているかを見ていく。そして、実践後にQ-U学級満足度尺度を実施し、児童たちの変容を考察する。

(5) 「できる状況づくり」と検証授業

ア 第一段階での取組 「持久走大会」へ向けての「できる状況づくり」

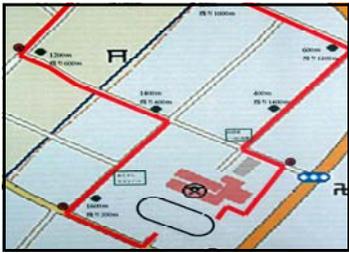
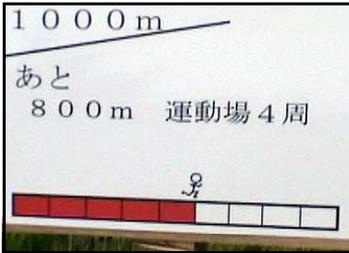
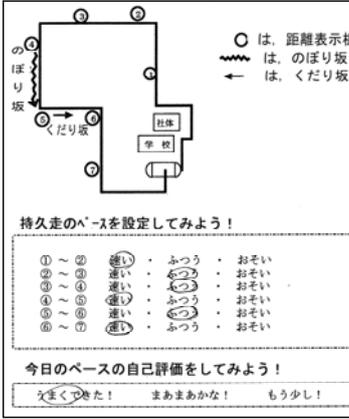
本校の「持久走大会」は、学校周辺の農道を使い、学年によって異なるコースで行われる。A児を含め他の児童たちにとっても、走るコースが分かりにくい。この行事の中で、A児には自分の力を十分に発揮し、自分の取組に達成感を持ち、その結果を周りの児童たちにも認めてもらう成功体験が必要であると考えた。そこで、資料1のような目標を立て、3つの視点を定め、A児だけでなく他の児童たちも利用できるように、写真や図などの手立てを中心に「できる状況づくり」を整えながら持久走大会に取り組んだ。(表1)

資料1 持久走大会の目標

学級目標
○ 持久走や走ることに親しむ態度を育成する
○ 寒さに負けない体と体力を培う
○ みんなと協力する心と励まし合う心を育てる
A児の個人目標
① 走るコースに見通しをもって走る
② 自分の力を十分に発揮する
③ グループ活動に最後まで参加する

表1 持久走での主な手立て

働き掛け	①コースイメージをもつ	②走る力を十分に発揮する	③周りの児童に認めてもらう
A児へ	教師とコース図を基にコースの確認をする 走る前にコース図と距離表示板の位置を1つずつ確認する 児童たちに伴走しながら、随時、次の距離表示板を指差し、目標にするよう声掛けをする	A児がペース配分を意識するように教師と距離表示板の位置を確認する 教師とコース図のアドバイス板を指し、その場所からのペースに気を付けるように確認する 児童たちに伴走しながら、A児のペース確認と声掛けをする	グループ作りの際、A児を受け入れやすい児童たちと組むように配慮する 自分の記録を意識して、ワークシートに正確に記入するよう声掛けをする 振り返りの時間、頑張っていた子の発表にA児のことに触れるように配慮する
	コース図 コースのイメージ化ができるようにする	ワークシートのタイム予想欄 他児童との比較ではなく、自分の記録に挑戦することを意識付ける	

A児と学級全体へ （視覚的 手立て）		②タイム! <table border="1"> <tr> <th colspan="2">今日の予想タイム</th> <th colspan="2">今日のタイム</th> </tr> <tr> <td>9分</td> <td>3秒</td> <td>9分</td> <td>12秒</td> </tr> </table> <p>7ポイント…すばらしい! ぴったり賞!! 6ポイント…予想タイムと9秒以内のちがい 5ポイント…予想タイムより10秒ちがい 4ポイント…# 20秒ちがい 3ポイント…# 30秒ちがい 2ポイント…# 40秒ちがい 1ポイント…# 41秒以上のちがい</p>	今日の予想タイム		今日のタイム		9分	3秒	9分	12秒	グループ活動ノート グループ毎に個人記録を記入させて、振り返りができるようにする 記録一覧表 全員の記録一覧表を提示し、みんなの様子に分かるようにする																											
	今日の予想タイム		今日のタイム																																			
9分	3秒	9分	12秒																																			
距離表示板 ゴールまでの見通しがもてるようにする 	ペース配分表 ペースの配分を意識付ける 	<table border="1"> <thead> <tr> <th>1回目</th> <th>2回目</th> <th>予想タイム</th> <th>大会タイム</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>9分24秒</td> <td>10分20秒</td> <td>9分16秒</td> <td>分</td> </tr> <tr> <td>9分45秒</td> <td>9分59秒</td> <td>7分02秒</td> <td>分</td> </tr> <tr> <td>12分53秒</td> <td>14分43秒</td> <td>12分57秒</td> <td>分</td> </tr> <tr> <td>10分19秒</td> <td>9分42秒</td> <td>9分59秒</td> <td>分</td> </tr> <tr> <td>10分06秒</td> <td>10分30秒</td> <td>10分45秒</td> <td>分</td> </tr> <tr> <td>13分33秒</td> <td>14分01秒</td> <td>14分08秒</td> <td>分</td> </tr> <tr> <td>12分53秒</td> <td>見学</td> <td>11分30秒</td> <td>分</td> </tr> <tr> <td>11分50秒</td> <td>9分02秒</td> <td>9分10秒</td> <td>分</td> </tr> </tbody> </table>	1回目	2回目	予想タイム	大会タイム	9分24秒	10分20秒	9分16秒	分	9分45秒	9分59秒	7分02秒	分	12分53秒	14分43秒	12分57秒	分	10分19秒	9分42秒	9分59秒	分	10分06秒	10分30秒	10分45秒	分	13分33秒	14分01秒	14分08秒	分	12分53秒	見学	11分30秒	分	11分50秒	9分02秒	9分10秒	分
1回目	2回目	予想タイム	大会タイム																																			
9分24秒	10分20秒	9分16秒	分																																			
9分45秒	9分59秒	7分02秒	分																																			
12分53秒	14分43秒	12分57秒	分																																			
10分19秒	9分42秒	9分59秒	分																																			
10分06秒	10分30秒	10分45秒	分																																			
13分33秒	14分01秒	14分08秒	分																																			
12分53秒	見学	11分30秒	分																																			
11分50秒	9分02秒	9分10秒	分																																			
周りの児童へ	走る前にグループでコース図の確認をするように声掛けをする 朝の会や帰りの会などでも、これまでのグループ活動の良かったところや個人の良かったところの発見などを、みんなで取り上げてほめ合う活動を行う	同じ走力の児童を見つけて目標にするアドバイスを伝える	記録が予想と違っていても、本人の頑張りを認めるように配慮する																																			

イ 第二段階での取組 「6年生を送る会」へ向けての「できる状況づくり」

資料2と表2のような目標と手

資料2 6年生を送る会の目標

立てを考え、取り組んだ。学級代表の

学級の目標 ○ 6年生への感謝の気持ちを込めた出し物を作り上げ発表するという視点をもって、話し合いや活動を行い、みんなで協力し活動しようとする態度を育てる ○ うまくできない状況には、みんなでアイデアを出し合って解決していく力を養う ○ 一人一人が役割を担い、それをやり遂げることで力を発揮していくことの大切さに気づき、互いに認め合いながら集団への所属感を高める
A児の個人目標 ① 実行委員の役割や活動の役割を最後まで果たすことで達成感を高める ② 見通しをもって参加し、意欲的に取り組むことを通して、周りとの良好なかかわりと協力していく力を養う

の「学校生活思い出アンケート」の結果を基にして、話し合い活動を行った。

その結果、6年生と運動会

で取り組んだ「スタンプ」を新しくアレンジし、感謝のコメントを

入れて発表することになった。発表の場所が体育館のステージになり、

限られたスペースでの細かい動きが必要になった。また、「スタンプ」は、曲に合わせて移動したり、

曲に合わせて型を完成させたりするために、主に聴覚で判断しながら動きを合わせていくことが必要になる。そのため、移動の時に児童同士で接触したり、型を作る時に他のグループと接触したりする場面が考えられる。また、

全員が見通しをもって曲に合わせた動きをしないと、タイミングがずれて接触したり、型が完成できなかったりすることも考えられる。そこで、活動中に、この「適切な位置取り」「見通しをもった動

表2 6年生を送る会の主な手立て

働き掛け A児へ 実行委員 スタンプ	①自分の役割を果たす 実行委員の役割を『活動の流れ表』に表し、事前に教師と確認をしてから活動する A児の位置を明記したスタンプ型の図を作成し、事前にA児と確認する スタンプの移動や型作りでは、事前に児童の動きに合わせてるように声掛けをする	②見通しをもって取り組み、協力する 本時の流れを表した『活動の流れ表』を黒板などに掲示し、いつでも確認できるようにする 曲の台詞に合わせた『スタンプの動き表』の拡大版を黒板などに掲示する グループのキーパーソンを決め、その児童の動きに合わせてるように声掛けをする
A児と学級全体へ	使用する曲の台詞を文字化し、配布する 取り組むスタンプの型を表した図を作成し、配布する ペアやグループなど自分が一緒に動く人を事前に確認してから取り組むように声掛けをする	8時間毎に区切って、曲の台詞とスタンプの流れを表した図表を作成し、配布する
児童たちによる「できる状況づくり」 位置取り 曲に合わせた動き	8時間のリズムに合わせての入場して立つ位置、移動して立つ位置など、ステージ上にバランスよく立つように意識付けを行う バランスよく位置取りができていないか確認しやすいように、活動の様子をビデオに撮る 位置取りの良いアイデアが出ない場合は、運動会でのグラウンドに記されたものを思い出すような声掛けをする 手立てなしでは、動きが揃わずうまくできないことや曲に合わせて動けないことを認識しやすいよう、曲のみを頼りにスタンプ練習を行う 視覚的手立てのアイデアが出やすいように、曲の台詞に合わせた『スタンプの動き表』の拡大版をさりげなく目の届くところに掲示する より自分たちに合った「できる状況づくり」ができるように、練習の中で『スタンプの動き表』の拡大版の欠点を示唆する	
事前の場作り	事前に体育館ステージの広さを測り、練習場所にビニールテープで同じ面積の場を表示する	

全員が見通しをもって曲に合わせた動きをしないと、タイミングがずれて接触したり、型が完成できなかったりすることも考えられる。そこで、活動中に、この「適切な位置取り」「見通しをもった動

き」の問題を話し合うように仕組んだ。そして、児童たちで、その問題を解決していく「できる状況づくり」の実践場面を仕組みながら進めた。

ウ 学級集団の変容

第一段階(1～2時)、第二段階(3～5時)で検証授業を行った。第一段階で、児童たちは意欲的に取り組み、A児を含むほぼ全員が自己記録を更新する結果が得られた。感想には、記録の向上への驚きや喜び、次回への意欲が多く見られた。また、伴走をした教師の間でも、視覚的な手立てが、走っている時の見通しに役立ったことや児童への声掛けに利用しやすかったことなどの声が聞かれた。

第二段階では、スタントの「位置取り」で、クリップを置いて目印にする児童が現れ、直後の話合いで目印になるものを用意すれば、立つ位置が分かりやすいことを確認し合う様子が見られた。また、クリップ自体が動いてしまう欠点があることから、目印シールを利用する方法へと発展させた。「見通しをもった動き」でも、うまくできない状況に全員が悩まされていたが、スタント図を利用するアイデアが出た。そして、写真1のように、自分たちで工夫を凝らしてい

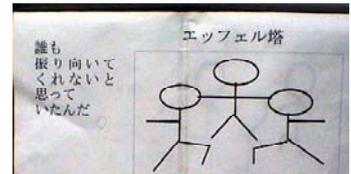


写真1 紙芝居式のカード

き、ついには8呼間ずつの動きをカードにし、紙芝居形式で曲に合わせてめくっていくアイデアへと発展させていった。回を重ねる毎に意見がたくさん出されるようになり、それを聞く児童たちの様子も真剣さが増していった。初めの頃は、動きの流れが悪く、型もしっかりできていなかったものが、「できる状況づくり」を自分たちなりに整えていくに伴い、協調性が見られて動きや型が良いものになっていった。そのことを児童たちもよく理解しており、感想には、みんなが協力して取り組む姿やスタントが良くなってきたこと、本番での成功を願う言葉が、多く見られるようになった。A児は、実行委員として、事前準備や写真1の手立ての作成を意欲的に行った。また、スタント練習では、自分の手立てシールに名前を書いて分かりやすくしたり、一緒に動く人をよく確認しながら活動し、成功体験を積み重ねていった。最終日には、A児が役割をしっかりと頑張っていたことを評価するコメントが、周りの児童たちの感想に書かれていた。

(6) 全体を通しての考察

ア アンケートの分析結果より

表3と表4は、各活動(第二段階)の自己評価と他者評価のアンケートをまとめたものである。表3のように学級平均で上下動が見られる

表3 学級の自己評価平均とA児の自己評価

項目	活動の見通し	めあての意識	友達のよさ	協力性	アイデア	積極性	次への意欲
実施日							
学級平均	2月17日	3.69	3.34	3.56	3.69	3.19	3.72
	2月24日	3.64	3.36	3.48	3.61	3.36	3.70
	3月3日	3.71	3.48	3.48	3.84	3.29	3.74
A児	2月17日	3	4	3	4	3	4
	2月24日	3	3	3	3	3	3
	3月3日	3	3	3	3	3	3

が、全体的に初日より最終日が上昇していることが分かる。A児は、初日に評価4が3項目において見られたが、最終日には評価3のみの自己評価とな

表4 活動で頑張っていた友達紹介

頑張っていた人	2月17日	2月24日	3月3日
評価された児童数	15人	13人	16人
A児を評価した児童	0人	0人	5人
活動に参加した人数	33人	33人	31人

っている。表4では、表3の学級平均と同様に2日目が増加して、最終日に増加している。また、当初は、A児の努力を評価する児童はいなかったが、最終日には5人がA児を認めて評価していた。表3、4と活動の様子から考えられることは、活動に意欲をもつほど、周りとの協力や積極性は出てくると言える。しかし、自分の活動に集中するほど、広く周りを見る視点が狭まり、「友達のよさ」を見付けようとする意識が低下してしまうのではないかと考えられる。A児は、第一段階で学級での自己有用感を高めたことから、第二段階では実行委員になり、張り切っていた。しかし、実行委員としての役割とスタントの役割の両方を掛け持つことになり、活動内容が他児童より多かったことから、自己評価が低くなったのではないかと考える。

イ Q-U(学級満足度尺度)の変容より

次頁図2、3から、全体的に児童たちの意識は、学校満足群の右上方へ変容し、学校生活不満足群

であった①～③の児童も別の群に変容している。A児も承認意識は変わらないが、被侵害意識が減少し、学校生活満足群に近付く変容をしている。このことから、ほとんどの児童たちに、承認意識の向上と被侵害意識の緩和がなされ、学級内に互いに認め合う姿勢ができてきたこと、より良いかわり方ができてきたことが考えられる。しかし、侵害行為認知群にいた④の児童が要支援群に変容してしまっていることやA児を含め侵害行為認知の児童の割合が増えたことから、より個に合わせた承認意識の向上やより細かい侵害行為認知の緩和が必要であると思われる。また、④の児童は活動時に身体接触を避ける姿が見られたことから、スタントの取組が要支援群に変容した原因であったと思われる。このことから、取り組む内容の選択も考慮していくことが必要であると言える。

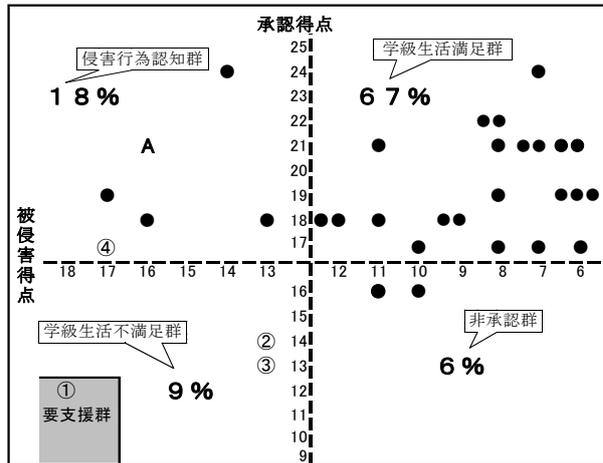


図2 学級満足度尺度分布(H17年1月)<全33名>

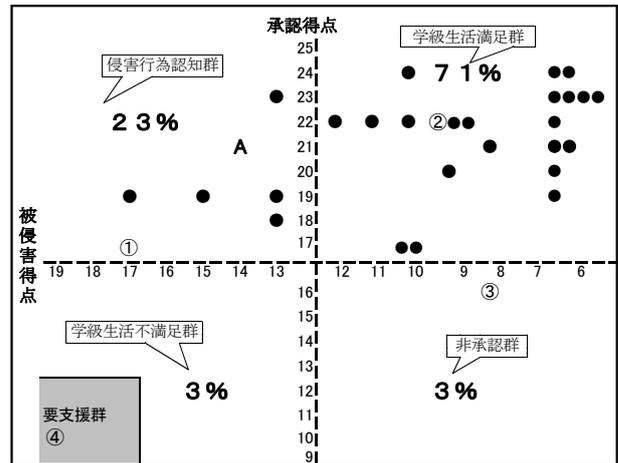


図3 学級満足度尺度分布(H17年3月)<全31名>

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

- ア 個別支援を「できる状況づくり」へと広くとらえ、それを整えることによって、児童がつまずきを乗り越えて自己有用感を高めていくとともに、学級全体の活動意欲も高めていけることが分かった。
- イ 児童たちが、つまずき体験の共有を通じて「できる状況づくり」に携わることにより、互いに理解し、認め合う気持ちを高めていけることが分かった。
- ウ 学級活動の目標に向かって、何かを改善していこうとする姿勢が、支え合う土壌を作っていく方法の一つとして活用できることが分かった。
- エ 子どもの気持ちを受容・共感すること、検査法を学ぶことができるようになれば、児童の実態把握や児童への対応をよりよくすることができ、学級の雰囲気作りや声掛けなどで有効な働きかけをすることができるようになるであろう。

(2) 今後の課題

- ア 学級全体の高まりは見られたが、取り扱う内容によっては、一部児童に不愉快な経験を積ませることになってしまうため、バリエーションを増やし内容を選択できるようにして、全員が満足できる活動を用意する必要がある。
- イ 学級満足群以外の少数の児童が認められる場面を、全体の活動を意識しながら、より細やかに明確に作り出していく必要がある。
- ウ 年間を通して、より仲間意識を高めていけるように、構成的グループエンカウンターとソーシャルスキルトレーニングを効果的に取り入れて計画していく必要がある。

《参考文献》

- ・ 竹田 契一監修 『LD児サポートプログラム』 2000年 日本文化科学社